

雲の研究家、阿部正直博士

雲の研究家として内外に有名だった本会会員阿部正直^{まさなか}博士は昭和41(1966)年1月1日突然襲った心臓障害のため逝去された。享年75才。阿部博士は明治24(1891)年1月9日阿部正恒^{まさたけ}の長男として本郷区駒込西片町10番地で生れた。阿部家は備後福山藩主の家柄で、正直氏も大正3年から伯爵を継いでおられる。学習院初等科、中等科、名古屋の第八高等学校(旧制)を経て、東大理学部物理学科を大正11年に卒業された。

中学時代に活動写真を見せられて、強くこれに興味を持ったことが、後の研究生活にも影響していることは、故人も述懐されていたところである。東大卒業後寺沢寛一教授や寺田寅彦教授の示唆で、映画を使って雲の研究をすることを終生の研究題目として取り上げた。このため理研に嘱託として入り、鈴木庸生研究室で写真乾板の物理的研究に従事した期間もある。

大正5年夏に分家に当る阿部家の直子嬢と結婚されていたが、大正12年には夫人同伴で欧米を周遊され、この時に雲の研究に必要な機器の購入もされた。帰国後御殿場に阿部雲気流研究所を設立され、また西片町の邸内には模型実験を行なうための実験室を造られた。こうして最初に出た論文は、気象集誌の第5巻第7号(昭和2年)に載せられた「気流の渦に生じた回り雲の研究」であった。阿部博士の研究の特徴は実体写真と映画の方法を併用したことで、いわゆる吊し雲は富士山体の障害で生じた気流の渦巻の巻き上がる部分に生じた雲だということを確証された。その後気象集誌や中央气象台欧文彙報(The Geophysical Magazine)に続々と研究結果を発表された。そして昭和5年後半にはそれらの別刷を携えて、欧米各国における雲の研究の現状を視察するため再度の外遊をされ、また昭和7年から始まる国際極年観測の準備をされた。

昭和7年8月から昭和8年8月までの極年観測に際しては、富士山にかかる山雲の特に念入りな観測をされ、中央气象台欧文報告(The Bulletin of CMO)第6巻第

1号(昭和12年)として466ページにわたる大きな報告(「山雲の形と気流、第1報」)を発表された。これは雲の普通のカメラで見た写真と、平面へのその投影図と、垂直面への投影図とを、同じページで対照して見ることができるようになっているので、雲が幾層にもある場合などは思いがけず教えられるところの多いものであった。その後同報告第7巻第3号(昭和16年)に「山雲の形と気流(第2報)」を英文で出版され、これらを主論文として昭和16年10月東大から理学博士の学位を受けられた。そして昭和19年6月には「雲の立体的構造およびその運動の研究」により運輸通信大臣の表彰を受け、昭和20年5月には「山雲およびその気流に関する研究」で帝国学士院から鹿島菘磨記念賞を受けられた。阿部博士の業績は、外国で出版された専門書や教科書にもよく引用してあって、外国における評価も高いことを知るのである。

昭和12年12月以降は中央气象台から、御殿場における気象観測事務を嘱託され、昭和16年1月からは常勤嘱託、昭和17年1月には気象技師に任ぜられ、研究部に勤務されることになった。昭和21年6月からは研究部長、これが気象研究所となるに伴い、昭和22年4月からは初代の気象研究所長となり、昭和24年6月30日退官された。退官後は鎌倉市浄明寺に住んでおられた。

昭和15年の夏から始まった前橋付近の雷雨特別観測にも、雷雲の写真撮影を担当して参加され、毎夏観測員と一緒に前橋付近の観測地で生活された。昭和16年の台湾の日食と、昭和22年の礼文島の日食にも、雲の変化を写真撮影することで参加されている。昭和17~18年ごろには津軽海峡の霧の観測に出張観測をされたし、緯度の割合高い所の雲の状態を調査することで、樺太庁气象台(豊原)に技術指導のため出張されたこともある。また気流に関する地形模型風洞実験では、富士山、箱根山、赤石岳、八丈島等のものや、幾何学的に簡単化した地形模型に関するもの幾つかもある。

また大戦中海軍気象部の依頼で航空機の塔乗員養成の教材用の雲の映画を作るため、あちこちで撮影され、それを整理中終戦となったので、後にこれをもとにして1本の文化映画を仕上げられた。

阿部博士の研究の進め方は、まずやってみるという行き方で、装置なども細かい所まできちんと整備してから始めるのではなく、動かしながら整備してゆくというやり方であった。それに伴い実験装置や器具についても色々の新しい着想が多い。特許をとられたものでは、阿部式自記ベンや地形日照儀等がある。

阿部博士はまた童心の世界を好まれた。それで昭和30年3月には西片町の元の阿部邸の一画に阿部幼稚園を設立、その園長となられ、なみなみならぬ熱意で園児の保育に当たられた。また博士がいわゆるテレパシーを信じておられたことも付け加えておく必要がある。昭和18—19年ごろ、富士山のまわりの観測所が共同して調査をすることを計画し、時々集まったことがあるが、富士山麓のどこかの旅館の暗い電灯の下で、「どぶろく」をくみ交しながら、遠くに離れた人と人との間にも瞬間的に通じ合う脳波(霊波)があるということを熱心に説かれた博士を思い出す。また戦後時々新聞や雑誌の記事になっ

た「空とぶ円盤」にも興味を持っておられた。

前にも記したように博士には野外の観測に出かけられるような機会がずい分多かったが、そういう場合のあまり快適とも思えない生活を少しもいやがられず、むしろ観測員とのわけへだてのない共同生活をかえて喜んでおられるようであった。博士を人に紹介する場合でも、「阿部伯爵」と言うのを好まれず、「雲の研究者の阿部さん」と言うのと御機嫌がよかった。

昨年秋ごろ博士御自身の雲の研究に関する思い出のあれこれを綴った原稿を脱稿され、出版の希望を洩らしておられたが、近ごろ某社で出版を引受けたということを知ったのはうれしい話である。またすでに整理して印刷になっているもののほかに、未整理のままに積んである雲の資料がかなりあることをいつも気にして、同学の人たちの役にたつような形にしておきたいと、時々洩らされていたとも言う。

御家庭は賑やかで、お子さんは男4人、女2人。お孫さんは計11人、一番上のお孫さんはもう結婚しておられるので、今少し生きておられれば曾孫を見られるところであったのに惜しいことであった。(島山久尚)

CALENDAR OF COMING EVENTS (after WMO Bulletin Vol. XV No. 2 April 1966.)

World Meteorological Organization

25 April - 9 May 1966	4th WMO/ECAFE Inter-Regional Hydrologic Seminar, Bangkok, Thailand
3 - 7 May 1966	WMO/IAMAP/COSPAR Symposium on Interaction between the Upper and Lower Layers of the Atmosphere, Vienna, Austria
12 - 17 May 1966	Executive Committee Panel of Experts for International Hydrological Decade, Geneva, Switzerland
16 - 21 May 1966	2nd session of the Working Group on Tropical Meteorology for the Caribbean, Central America and Mexico (RA IV), Mexico City, Mexico
23 - 27 May 1966	Working Group on Radiation (RA VI) Uccle, Belgium
26 May - 10 June 1966	Executive Committee, 18th session, Geneva, Switzerland
30 May - 9 June 1966	Scientific discussion of interaction between sea and air (during International Oceanographic Congress), Moscow, U.S.S.R.
13 - 15 June 1966	Executive Committee Panel of Experts on Tropical Meteorology, Tokyo, Japan
5 - 9 September 1966	WMO/IAMAP/SCAR Symposium on Polar Meteorology, Geneva, Switzerland
20 September - 1 October 1966	Technical Conference on Automatic Weather Stations, Geneva, Switzerland

Other international organizations

30 May - 9 June 1966	2nd International Oceanographic Congress, Moscow, U.S.S.R.
23 - 30 July 1966	1st International Symposium on Methods in Agroclimatology, Reading, U.K.
26 August - 2 September 1966	4th International Biometeorological Congress, New Brunswick (N.J.), U.S.A.